特42
986

真録 文庫 佐野鹿藏英雄傳 上巻

實録文庫 佐野志賀蔵

英勇傳上の巻

東京　春風亭香雨暗記

説起そいつの頃ふやたらけん肥後の国熊本の城を少し離れ野山ばかり須しも春の彌生どき感りの花ふ遠近の貴賤老若つとひきてたの凶詠めの木の下ら汁も鱠もさくら哉風雅客ハ詩歌を吟じ酒谷むものハ舞蹈るなるハ婢娟たる美人紅粉を粧ひ錦繡を重ねて花ぞ下に本坐ハ花ぞ根も恥つべきおもむきなり足引の山路をたどりてハ菅の根のあゞき春の日も短く帰るを忘きて暮るを惜むハ是将男女の情慾ふ似て後朝の名殘をかこつふ同じ非常の花ふ有情の群集いく團居ふるその中ふ一際目立女中連幼婦交りの艶姿破籠さへを打開き更ふ上下のへだてふく笑ひさゞめき居たる折しも語路つきとうゝふ住所不定の凶徒同氣もとむる四五人連いづれも強くえひたるゞ眼をいからし肘を張り一歩ハ高く一歩ハ低く蹌々蹌々として敵手ふきふあほ詈り花見人のまとるふ分け入り盃盤を蹈散し其場ふ有合ふ酒

者を我もの顔ゐ呑くらひ咎る者ゐハ喧嘩を吉ゑ乱妨狼藉傍若無人ゐ終日の奥醒もて、
憎めど其甲斐ゐなう彼悪漢らハ其処此処とうちたのらゝ来たりゝが女中連と見るよりも
どや〳〵と走寄ていでや馳走ゐたのづからんと泥足蹴立てどつかと坐せバ女子達ハ怖驚き辨當
酒器も其侭そて右往左往ゐ逃出ゝを悪徒ども酒奥ゐ乗ゞて中ゐ美面よき一人の娘を矢庭
ゐ手どり足どりかつぎ行んとあゝ程ゐ母親らゝきう引かへゝやらじと留るを邪魔ゑあと蹴
退蹈居ゆかんゑかゝる折から見物の多勢をあゝ分けその年も二十二三とおぼゝき男つとえせ入
て前ゐ立たる悪徒二人を前後ゐ投退け娘をもぎとり老女ゐわとせバ殘る三人ハ氣勢を奪
れ忙然とゝて立たるが眼をむきいだゝ大ゐ怒りこざかゝき二戈ゐ此奴を志めよと五人等
ゝ有りゐ棒をおつとつて打てかゝるを若者ゑ右へかゝゝ左へはぞゝ無手ゐて五人をいたく労り
ゝ飛鳥の如く馳廻りて二人の襟首ゐひ掴み人碌ゐ投付れバ三人是ゐうたれつゝ将棋倒ゝゐた
ふるゝ処を落たる棒を拾ひとり當を幸打居るゐ五人の悪者手足を縮め今ゝも息ハたえく
ゐて虫の音ゐ等ゝき聲を出ゝ御免々々と託入るゐそ彼若者ハ最前の女達が逃延ゝを得と

見そまゝさらバ許ゝ得させんゐ向後を屹度つゝめといちくゐ首筋掴で引起ゝおゝやれバ膝
をさそり腰をかゝへ我と我手で脇をとり面を去のめて五人の悪者雲を霞と逃失せり彼若者
者ハ跡見おくり泰然とゝて塵うち拂ひ麓の方へ去らんとせゝ折から後者ゐ打物もたせ五十余
りの有髪の侍士ゝひゝゝく出立ゝが見物おゝ分け馳来り彼若者が袖をひゝえ卒尓ゐから
物まうさん其ハ當国の領主音川家の藩士内田源左衛門といへる者ゐり今日我等愚妻娘下
女ども花見物ゐ来りゝ処もうらぞも悪者ゐ取巻れ難義の折から若き人のゑせ入て悪者等と
争動ゐ及びゝ間ゐ逃飯りゝと聞くと等ゝく多勢無勢覚束ゐゝいで悪者等をくゝり上て
彼人を救ぜやと思ひゝゐ是迄急ぎ来りゝ処見物の噂を聞くゐ御身一人多勢を合手ゐいと
目覚ゝき働きゐつて忽地きやつらをとりひゝぎ給ひゝとゝ某妻子を助けられ恥を清め給り
ゝ再生の恩人ゐれバ詞の報もいたゝ後日とまうそも覚束ゐけれバ某宅まで駕を枉られ玉ハる
べゝと叮嚀ゐ述べれバ若者地上ゐ両手をつゝ名も匹夫がいさゝかの働を御称美ゐると分ゐ過た
る御詞ゐゆゝり最早入相ゐも程近くれバ此侭お別ゐ申そべゝと辞退ゐせどもかの武士ハこれを

許さぬ曲て私宅へ伴なんと種々ふ詞を尽しくれべ今はいあまん辞もあく源左衛門と同道ふ城中へぞ到りける○怎くて内田源左衛門へかの壮士を同道し城中へ飯り我家へ伴あひ妻子をいちく引合せ今日の危急を救きたる悦びを述させ躾て酒肴を出しさまく勧め饗應しなるど源左衛門ハ壮士ふうち向ひ問ひけるやう失礼あがら其許ハ何方の人ふあむをやらん今日の働き奇の〳〵尋常の人ふならぬ何ぞ御望の筋ふてもならんふハ遠慮ふく語りたまへ我力ふて及ぶ程の事ふらべ御相談申さべし某小身ふれども主君へ一刀流の御師範まうしなげ且一家中の諸士へ指南致し遣せばまこく不足あきふ似たり志のこふらぬ惣

領の男子今年十九戈ふ相あり民十郎と呼び二男ハ未だ幼少ふて亀之助とふづけたり今日其処ふ救いれしハ中子ふて梅とい(り若其許我家へ止り可あるべくハ御世話致したゆくく主君へ聞なばよろしき武士ふも吹挙まうさんより夫とても望みあらばいうある義ふてもふいうんなら王と信実誠心面ふ顕きいと念頃ふ見えけれバ壮士をつと平伏つ〳〵斯まで賤しき僕を人がまく恩沿御厚志の段心魂ふ徹しなりがたく謝礼詞語ふ尽し難し我ず義ハ元来日向の産ふれ(ども幼少のをり両親ふおくき兄弟ふも死別き詮方あさふ当国ふ来りのちなべなるふより夫をたよりて限見川のふとりふ小家をかり漁を業とふ魚を市ふ賣なるきを

うゝと今日を養ひ罷在れあり段々の御厚志ふかまへす　あき身の上話ふ御坐臭を妨げ御縁もあらば又重て見参仕るべゝと暇を乞ふて皈らんとするを源五右衛門袖をひかへ其処の心底唐土の韓信ふ似たり去られども聊の魚を貴ぶるかんより我方ふ止りて剣道を学びあば力量勝まゝ御辺あきハ虎ふつばきを添るが如ゝと達てこれを薦めゝらば壮士ふほひふ悦びて御意ふ随ひ申さべゝ何卒御教導ねがひまつると師弟の契約ふゝてより源五右衛門その名をとふふ志賀蔵と呼び今年廿七ありと咎へられ其夜より止めあき一間を與へ遣はけるふ源五右衛門の長男民十郎ハ隣国まで主用ありて罷りゝが四五日を経てかへ

り来り父母より志賀蔵のやうを聞き早速對面あゝ悦ぶと限りふゝ志賀蔵も又扶助の厚きを謝ゝふける○茲ふ民十郎が同役芦花主殿といへる者ありて才智少ゝあるものふれど其心ざま邪ふて且好色の性ふれば民十郎の妹梅子が美面よきふつゝゝ恋慕ゝいひよるとを工風をきゝども更ふ便を得ざゝらばこを打付ふいもんこそ反て成就せんと剣道修行ふてよせて源五右衛門が弟子とあり日々ふ通ひ来りつゝ折を見合せ芦花い或時梅子を捕へつゝ艶書を出ゝ口説ゝふ此方ハ堅氣の生娘ゆゑけんもほちゝの勢ふて奥の方へと逃行ゝ折から主人源五右衛門ハ訪らぬ今のやうを窺ひ以の外ふ怒を発ゝ其日主殿を破門ふゝ以後ハ

主用の外出入を堅く差留けるを芦花主殿い是より深く遺恨ふ思ひ乍ら恁りーふどに芦花が相良の親類より書状を持参せし者ありと取次の若党がさし出せ書翰をとりつげ讀下せふ此旅客ハ重流の達人ふて當時浪人ふーゐける大館八郎左衛門といへるものゝ面ゐれば早速大館を呼入對面ふ

夫より我家へとめおきて此と主君へ言上せんと折を伺ひゐたりーふ芦花御前ふ伺ひ日武藝の御物語ありーるば是幸と大館が と申上ーふ主君固より武を好み主ふ御とゆゑ殊の外御慌嬉うるいーく早速大館ふ目見へ合を許

さるーより御意ありーるば芦花大ふうち悦び大館ふ委細を傳へ衣服調度の准備をいそぎ城中へ参上ふ一縁側ふ平伏せ音川侯遥ま見玉ひ大館を近く召さき武道の古実をおん諮ありるふ答ふるところ辯舌水の流るゝ如くふれば御感斜めならず御盃を下ーおれ大館ハ面目身ふ余り芦花もともく御礼申上げるふ殿ふい追て呼出さん先今日い下るべーと仰げるふで両個案ふ相違して其場を退出ふーつも家ふ帰りいらふ大館氏今日御前の首尾始の程いやうなよかりーが追て呼び出せが氣ふらずされども武道御好の君ふれば應御試の上召抱へんとの思召ふるべー其手合ふハ御師範番たる内田源五右衛門あるべー彼奴老惚たれども一刀流の極意を究

たる者ゆゑにあぐり難し彼あくんばおそらくい貴殿に及ぶ者有まじと思ふあり夫に付其彼に
かやう〳〵ちり〳〵の意趣ありとその顛末を物語れば大館い腕をくくもんじ工風を凝しけるが稍有て
小藤をうち某両端の計略をおもひ付たりこい貴所の為に恨をかへし我為に邪魔を拂ふ良策
たりと耳に口寄さゝやき示せば芦花い横手を打ち幸某と内田が悴民十郎と同役にして来月い彼
が當番あれば主家の重寶旭丸の名
劔を盗出し民十郎に渡し付んさまれ
い親い国ぢらひ民十郎い軽〳〵て切腹
先生の妙計誠にかんちん張良の皆
を取て奴とあるべしと打語ふて其夜
いせをみぬ翌日主殿い民十郎が方に
至り面會あり〳〵て申けるい来月な
貴殿御宝蔵番につき鍵い當廿

五日に引渡ぬ先例あれども拙者
少々私用ありて上へ達し隣国へ赴
くあれば今日貴殿へ御渡し申あり
尤来月二日に立合の上宝物改め
申べけれども夫迄他行あるに心づ
りひにへば鍵を預り王ひてよと云ふ
ぞ民十郎承諾あせしかば主殿心
中仕済たりと打悦び夫より宝蔵
の錠前へ矢立の墨をぬり白紙へ寫し取り我家に素知らぬ顔してゐとりける○偖て主殿
い民十郎を訪り御目附役へ届け一両日隣国に所用ありと披露し我家に隠き其夜忍び
出城下なる鍛冶屋七平といへる者の方に至り斯夜中来りしい我等身の上に付一大事の
れいあり其譯い御宝蔵の鍵番たりしが何処へ失ひしや鍵をあくしぬ此を上へ知れる時を

重き咎を蒙るあれば其方内々合鍵を拵へくれよさもれば我等安堵もあり偏に頼むと誠
しやかに云付れば七平い愚直あれば是を実と一議に及ばを請合ければ主殿い懐中より錠
の形を取出つ翌日と約して立帰りぬ偖て翌日芦花主殿い又七平が内へ至り詭おき鍵を
受取り思ひよりも能出来たれば祝ひに一盃呑まべ是い鍵の代りと小判一枚與へしば七平
い押戴き妻子諸共主殿に連られ城
下もづれの料理屋にて頻に飲つ食つ
してもや大醉にあり一らば此家の勘
定を一跡より帰れば汝等い一足先へ
まかるべといふに七平夫婦の者い七
戈にある娘の子を脊負つ並木の
松の下道をたどりて帰りけるにも
や日も暮て宵暗にあるに何者ともも

れば背より蹌踉歩行七平を只一刀
に切付るに倒るといひつ息絶たり妻
い驚き大聲にて人を呼立て迯んと
もをかへも刀に首打落し背より
轉ぶ稚子をまもむざんにも殺し
足にまかせて立去りたる是ハ芦花大館
と計り合鍵を拵へ悪事後に露
顕せんとを怕れ七平夫婦に子共
まで押片付たる其を知者外にのらざれば彼三人の死骸い法の如く検視を受け親類ども
うち寄て跡ねもごろに吊ひけりも翌月にあり主殿い宝蔵に忍入り旭丸の名剣をぬ
もみ中則二日の日に至り老中立會の上鍵受取の役内田氏十郎へ先日芦花より鍵預りい
間手細工と鍵を三殿にとりける芦花是を受取て錠を開け宝殿より名剣を入れる箱

を取出さんとするをこゝ如何ゝ箱いもぬけの殻にして御劔紛失なせしゝ民十郎ゝ打驚きゝひ譯ゝさんとするをも待ゝ芦花王殿ゝ氣色を変ゝ此盜人ゝ餘人ゝあらず民十郎ゝ相違なるまゝ疾白狀を致さぬと詰寄るのを民十郎ゝ固より覚ゝあき事ゆゑ尚かく〳〵と論辯するを老臣等ゝ二個を宥め此事主君ゝ聞ゝ上ゝ音川侯大ゝ怒玉ひ民十郎が罪科を行ふべしとて執權長尾監物ゝ命ぜられ父源五右衛門ゝ閉門ゝたるべしと仰付らるゝ是ゝよつて執權長尾ゝ民十郎を我家ゝ呼上げ庭前ゝ居此度の罪科を申渡し覚悟なれよと水をたゝ刃をそらりと拔放ち民十郎が背ゝ廻りアと聲かけて胸打ゝ首筋をうしと打とゝ倒す泰然として少も動ぜず合掌なる丈

夫の魂監物ひそかゝ感ずる折から庭の垣根をゝ分つゝ来者ゝ内田が奴僕忠助とゝる者涙を流し監物ゝ主ゝ代て一命を捨んと頻ゝ乞しゝ監物涙が忠義をめで且民十郎を惜むの余り民十郎の衣服を忠助ゝ著せ忠助の衣服を民十郎ゝ著代て坐ゝの如く忠助を民十郎が身代とし首打落し民十郎ゝ監物が袖の下より金百両を恵つゝ此場より人知ぬ逃て命を助けしゝ民十郎ゝ是より名劔詮義の爲ゝとて何処ともなく出行め偖も音川侯ゝ主殿ゝ命ゝ日外汝が吹舉せし大館とせらんを召抱んと思ゝあり付てゝ武術を試さん爲内田源五右衛門が閉門を許し試合いたせん此旨大館ゝ申べしと仰られしゝ芦花ゝ畏り退出ゝ又源五右衛門ゝ老臣より試合の内意

なりて閉門を許されるが悴が罪科を蒙りて死刑と聞て毋妹も安煩ふ其処へ一封の捨手紙玄関より
なりしらば下女に拾ひて内田に出をを開て見るおこいふまがふくあき民十郎が手跡ゆて忠助が身
代の事より一金を助くりしらば是より御剣の詮義せんとのやうをを委しく記せしぞ監物が仁
心家来の忠義を深く感じ尚此事は後々まで堅く口留あせしらば外ゆ知るものあるとりくり　偖て
大館八郎左衛門い兼ての目論見相違せしも今更詮方なのらざれば内田と試合の當日ゆ至りしらば主殿と共ゆ出張ゆせばすと内田ゆて志賀藏が是非とも俱ゆまゐりたしと頼ば是を若党とも付随ゆそで出ゆけり音川侯い此日小書院ゆて試合御上覧の設なり老中始役人等い殿の左右に

扣たるい更ゆ満ら星の晃く如く侍て内田大館の両人い試合の場ゆ臨みつゝ式礼ありてヤアと聲かけ木刀おつとり打むかふゆ大館い只一打と氣を焦ち内田の真向めがけて込入を内田い透さぬ様しらへ大館とたびいのかさとと飛鳥の如くおめいてかくるを内田を木刀のひまをくぐり身きつたる大館が右の肩先をつとと打五足六足引退を兵方い追掛打んとするを打せもやらで大館が木刀を空ゆ奉上て十分勝ちを示せしゆ芦花無念の餘ゆ落たる木刀を拾取内田を目掛て打込を志賀藏透さぬ踊出主殿の襟かみを掴み人間許も投退れい暫ハ起も得ざりくり是ゆ依て内田いは前の首尾も能又志賀藏も目ゆとまり有難きは辞をも玉りしゆ大館い召抱へゆもあるぬのみゝ吹舉人の芦花主殿い今日の振舞武士道ゆ友きしとて門前拂ゆ成しらば両人弥

内田を憎み意怨を重ねり○却説大館芦花は風雨烈しき夜半を幸日頃の恨を晴さんと内田が邸に忍入源五右衛門が寝所に至る前後も知ぞうまゐの体に仕合能と行灯の光をふき消し布團の上より只一刀にグサと突き源五右衛門は驚き覚め痛手を出せど枕元なる刀をおつ取二人を相手にたゝかふ物音只事あらぬと三男亀之助も此場に駆入父の身の上覚束なしと白刃を目當に芦花と切結ぶ中志賀藏は灯火持て入来り夫と見るより芦花が腕を捻上投付れば雨戸を打抜き庭前の石に打れて其侭に生死は知ぞ息絶たり此間に志賀藏は駆入見るに源五右衛門と八郎左衛門は志のぎを削り戦ひ居たるが内田は最初の痛手に弱りたぢろ〳〵所を又一刀助を切付られ已に危き折から志賀藏飛入拳を固め大館が横顔を力任せにハッシと打ば金剛刀打れしまべ死然面は碎くる如く倒るゝ処をかい掴み是をも庭に叩付源五右衛門を介抱する間に妻も娘も駆来り手負に取付歎くに源五右衛門は苦氣に敵は亡く大館芦花也と云に志賀藏庭に下立ち灯火に よ〳〵見れば芦花主殿に相違なし今人を尋るに何処（辺）に影だに見えねば詮方なくも芦花を引起て活を入息ふき返すを待ち縄をぐる〳〵巻に上げ柱に繋ぎ又源五右衛門を介抱するに内田は息もとゞまりて志賀藏に打向ひ某不運にて悪徒の為

命を果せり貴公儀は始て逢其時より只人にあらと思ひしうど深く包まるゝに依て強て問ざれども此期の思で素性を明されば我娘を妻とせし亀の助へ力を添られ仇を報ひ呉られよ長男民十郎事は長尾監物が情に依て実に存生あるあれど宝剣手に入ざれば故国なると能くば頼むゝと云れば志賀藏涙を押拭ひ尤なる仰辞也我ら斯落果て名乗べき身にあらねども強て包む信義に背り某実は菊池家の老臣佐野弾正が三男同苗志賀十郎と云る者也細世の譲に依て父が勘氣を蒙りて遠く此地に流離候也と聞て内田は打驚きされば愚眼に違ひ歴々の御子息也我ら如きの賤とまでべき人にあらねど是も前世の因縁と思れ頼の一義承引せ玉へかしと云を此世の暇にてなれば息は絶ぬ親子を始志賀藏も死骸に取付歎きしが斯て果ぬと死骸を片付翌朝前夜の騒動を老中に訴て生捕芦花を差出せば主君の命に依て芦花を亀の助に玉へられば志賀藏もとゞめ此悪徒をあぶり殺しにさとみ首打落源五右衛門が位牌に手向て供養せ夫より亀の助志賀藏と倶に長尾監物が方に至り大館八郎左衛門其場より逃失へば彼が行衛を尋ね亡父の仇を報んと存へば暫は暇を玉へ度は前宜は取成を玉へと願ひれば監物早速言上あを日あらば亀の助を召出され目見仰付られ神妙の願也と即時に聞届有て志賀十郎のとお尋なるにぞ

委細の始末言上す及ふ是又目見仰付られ免許の墨附数々の引出物を取り志賀十郎力量を賞し有度〻き所望あれば志賀十郎辞み難く前に於て大力を顕れば亀の助が后見安泰也との仰ありて金三百両路用として志賀十郎ふ主人内田家に其仮ふして差置る間本望遂し後目出度故国にて〻との上意あれば両人有難き仕合と礼申上前を退き老中へも一礼を述宿所ふ帰て老母お梅ふも前の首尾を物語れば有難涙ふ暮ふり斯て老母ハ黄道吉日を撰み志賀十郎お梅ふ婚礼を取結ぶ歓きの中の悦ふて其月の末方吉日を待て出立ふさんとする ふ母親お梅も国境迄送出るふ源五右衛門の門人ふも大勢ふて送来り門出の餞別夫々有て途中ふ献を汲かハし母妻を始門人達ふも別を告て只人何国を當と定ふく行程ふ安芸国より備後の尾道ふ上り撫津をめぐり三年越ふて大坂ふ出たりしが当所ハ分て繁花の地ふれば此地ふ暫逗留せんと宿屋ふ泊りあちこちと見歩行内是ぞと云手掛もふれば或日天満宮ふ参詣せんと天満橋ふ差掛るふ乗物二挺引続来るふぞ両人片脇ふ寄後ふ る駕を差覗ふ内ふ ある武士(豈計ん年頃尋る当の敵大館八郎左衛門ふるふぞ志賀十郎亀の助ふ目くばしふ一旭ふ駕の棒鼻ふ立ふ捕大館八郎左衛門暫止れ斯云(汝が為ふ討れた る内田源五右衛門が倅同智佐野志賀十郎ふ也亀の助俱ふ天を戴ざる仇と名乗て勝負せよと詰掛るふ大館(乗物の内ふて驚きたる其場のやうとハ下劣ふ〻〻〻

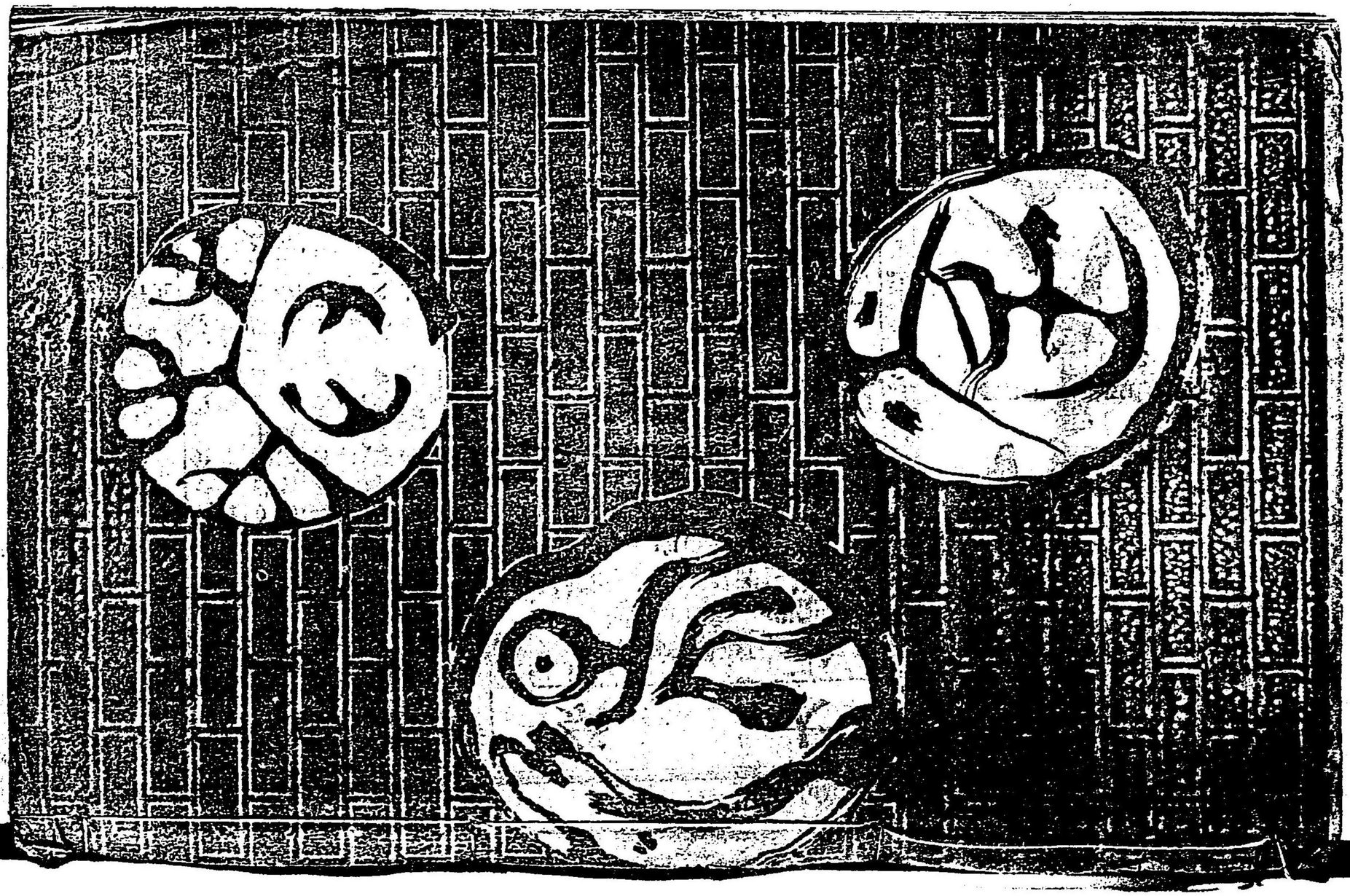
佐野志賀蔵英ふ男傳上の巻終

NO.1

明治十七年十月廿一日御届
同十八年三月　出版

編輯兼出版人　春陽堂　和田篤太郎
岐阜縣平民
京橋區南傳馬町一丁目十四番地

實錄文庫
白子屋お駒　大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　南總里見八犬傳　全二冊　定價金十錢
同　莨屋喜八大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　赤垣源蔵徳利の傳　全二冊　定價金十錢
同　佐野鹿蔵英勇傳　全二冊　定價金十錢
同　荒川武勇傳　全二冊　定價金十錢
同　宮本無三四二刀傳　全二冊　定價金十錢
花茨露の面影　全四冊　定價金十錢
春迺錦戀の妻折　一冊五十錢　全三冊
三巴戀迺白雪　一冊三十九錢　全三冊　定價三十九錢
園花匂姫垣　全二冊　定價二十六錢
八重櫻里迺夕暮　全二冊　定價二十六錢
八重戀路迺葛羅　全二冊　定價二十六錢
ぶすい
小三娘節用　全一冊　定價金四十錢
金丑娘節用若美登里　全一冊　定價金四十錢
續編　おくま　全一冊　定價金四十錢
惣二郎江戸紫　全一冊　定價金
實説合鏡心乃妍醜　全一冊　定價金三十錢
艶話近世月雪花戀路の踏分　全三冊　價金六十錢
奇縁海南第一勇士汗血千里駒　全三冊　定價五十四錢
異國奇談和莊兵衛　全一冊　定價金八十錢



特42
986

205156-001-5

特42-986

佐野志賀蔵英勇伝

春風亭香梅／暗記

上

M18

EDV-0169